



昭和18年9月、土浦駅から行進して土浦海軍航空隊に入隊する「海軍飛行予備学生」第13期生。(土浦海軍航空隊正門) 『おか目八目』HPより転載

## 霞ヶ浦(その13)～海軍飛行予備学生～

土浦海軍航空隊といえば「予科練」の地として有名ですが、土浦海軍航空隊には「飛行予科練習生(予科練)教育部」の他にもう一つの教育錬成組織、「飛行予備学生教育部」があり、飛行予備学生への基礎教育が約4ヶ月間行われていました。前者が下士官パイロットを養成したのに対し、後者は士官(幹部)パイロットを養成しました。土浦中学でも多くの先輩たちが予備学生や学徒出陣を経て戦場に赴きました。

## 海軍飛行予備学生制度

海軍の幹部(指揮官)は、海軍兵学校・海軍機関学校を卒業した「士官」と下士官から選抜された「特務士官」から構成されていますが、1932(昭和7)年、満州事変が勃発すると、航空幹部(士官)の増強が必要となりました。そのため1934(昭和9)年から、大学や旧制高等学校・専門学校出身者から募集して、年間30～40人(当初は飛行科のみ)ほどを採用し、海軍少尉に任官させる予備学生制度が設けられました。アジア太平洋戦争が勃発すると「飛行科(飛行機搭乗員たる士官を育成)」に加え、「整備科(飛行機の整備を担当する士官を育成)」「兵科(艦隊勤務の士官を育成)」にも拡大されましたが、霞ヶ浦、土浦海軍航空隊と関わりが深かったのが飛行科の海軍飛行予備学生でした。海軍飛行予備学生制度は、旧制大学卒業生で満26才未満の者、大学予科、旧制高等学校、専門学校卒業生で満24才未満の者で、志願し選抜試験に合格した者に錬成教育を施すものでした。教育期間は約1年で、まず約4ヶ月間、基礎的、座学的な科目を土浦海軍航空隊等の基礎教程で行い、基礎教程卒業後おおむね半年間、各練習航空隊で練習機による実習を行いました(「予科練」と「飛練」の関係と同じです)。入隊1年後に少尉に任官させ、その後から実用機教程に進み、機種や練度により期間の長短はありますが、実用機課程数ヶ月で一人前の航空機搭乗員(士官)に育て上げるものでした。

1934(昭和9)年11月入隊の第1期学生は僅かに6名であり、1942(昭和17)年9月の第12期学生までは100名以下の少数採用でしたが、アジア太平洋戦争が激化航空決戦が熾烈となった1943(昭和18)年9月には、昭和18年度の繰り上げ卒業生から5万数千名が海軍飛行予備学生を志願し、5,199名が合格、第13期学生として採用されました。この大量採用の理由は、予想以上の搭乗員の損耗と、予科練習生の採用増加で、海軍兵学校出身の搭乗員のみでは士官搭乗員が不足したためでした。彼らはおおむね半数に分かれて土浦、三重海軍航空隊に入隊、10月1日に予備学生を命じられ、基礎教育が開始されました。1944(昭和19)年1月中旬、土浦、三重海軍航空隊を卒業、1月末までに中練(93式中間練習機)教程のため、土浦海軍航空隊卒業生は谷田部、筑波、第2美保、東京、出水、高雄、北浦、上海航空隊へ転隊、速成教育を施し、一定の練度に達した者から他の航空隊に転隊し、実用機教程に入りました。1944(昭和19)年10月には海軍少尉に任官、戦場へ赴き、台湾沖、比島、ウルシー、硫黄島、沖縄、本土周辺の航空戦で、13期生は先頭に立って奮闘し、1,616名が散華、その内特攻での戦没者は44名にのぼりました。

次の第14期生は従来の期と異なり、「学徒出陣」による徴兵招集により採用されました。1943(昭和18)年10月1日、勅令第755号により全国の大学、旧制高等学校・専門学校の文科系学生の徴兵猶予令が停止され、20才以上の学生が、各学校に籍を置いたまま休学とされ、臨時徴兵検査を受けることになりました。その結果、学業途上の学生たちが陸軍に約8万名、海軍に約1800名が召集を受け、兵として入隊しました。海軍では12月1日、横須賀、呉、佐世保、舞鶴の各海兵団に二等水兵として入団させ、教育期間中に予備学生・予備生徒(大学予科・高等学校・専門学校在学から入隊した者を「予備生徒」と呼びました)採用試験が行われ、1944(昭和19)年の1月末に、2,365名が飛行予備学生操縦専修及び偵察専修として土浦海軍航空隊へ、1,260名が飛行要務専修として鹿児島海軍航空隊へ転隊しました。同じく第1期予備生徒として1,270名が入隊、各海兵団から三重航空隊へ転隊し、基礎教育を受けました。土浦海軍航空隊での基礎教育は同年5月に修了、中練教程のため操縦専修は陸上機が谷田部、出水、第2美保、博多海軍航空隊へ、水上機が鹿島、北浦、詫間海軍航空隊へ、偵察専修は大井、徳島海軍航空隊へ転隊しました。操縦専修は4ヶ月の中練教程後、9月下旬以降実用機教程に進み、偵察専修は1945(昭和20)年3月から4月に実戦部隊に配属となっています。

中学40回の吉田一也氏(元土浦市教育委員会教育次長は、1943(昭和18)年9月、早稲田大学法学部を卒業(6ヶ月短縮)し、10月末に水戸三の丸小学校で臨時徴兵検査を受けて、12月10日、横須賀第2海兵団に入団しました(入団の準備で髪の毛を切った時に、これが遺髪になるかもしれないと母親に手渡しています)。海兵団で行われた飛行予備学生になるための適性検査に合格して、1944(昭和19)年1月25日、第14期飛行予備学生として土浦海軍航空隊に入隊、第13分隊に所属しました。分隊長は同志社大学出身の第11期生で、階級は中尉、同志

うち特攻戦没者は658名にのぼりました。



特攻隊員として鹿屋海軍航空隊で終戦を迎えた渡辺賢一氏(予備学生14期、新潟県十日町市圓通寺住職)の努力で建立された慰霊の像と移設された谷田部航空隊の隊門(圓通寺境内) 『神風特別攻撃隊』HP号より転載

社大時代はラグビーの選手でした。土浦海軍航空隊での基礎教育修了後、5月27日の海軍記念日に谷田部海軍航空隊に配属(総勢255名)され、93式中間練習機(赤トロンボ)による飛行訓練を約4ヶ月受けました。さらに実用機(戦闘機)教程に進むため、10月1日神ノ池海軍航空隊に赴任(120名)しましたが、神ノ池海軍航空隊が特攻機「桜花」の訓練基地になったため、11月4日、再び谷田部海軍航空隊に戻りました。11月25日付で少尉に任官、単座戦闘機を複座に改造した練習機で訓練を受けていましたが、1945(昭和20)年2月14日以降、空襲が激化、谷田部航空隊が迎撃の実戦態勢となり搭乗訓練ができなくなりました。2月17日の晩には、特攻隊志願者の募集が行われ、第14期生からは第1次特攻隊に28名が選抜され、零戦による特攻訓練が毎日行われました(飛行機や燃料の不足から特攻隊以外の訓練はできなくなりました)。4月2日、谷田部航空隊の特攻隊は神風特別攻撃隊昭和隊と命名され、九州の鹿屋航空隊に進出、4月14日の第1次から5月11日の第7次まで出撃、14期生は28名のうち21名が出撃戦死、7名が出撃命令を待ちつつ終戦を迎えています。第1次の選抜にもれた吉田氏は、2次・3次特攻要員として本土決戦に備えるなかで終戦を迎えました。14期生全体では、予備生徒1期生と合わせると、4895名が採用され、492名が戦没、うち特攻戦没者は200名となっています。

その後、採用は昭和20年4月入隊の第16期生まで行われ、1期生から16期生まで、約15,000名が入隊、戦没者は約2,400名

### 土浦海軍航空隊での生活

土浦海軍航空隊での飛行予備学生への教育は約4ヶ月間、海軍飛行科士官としての基礎を習得させるもので、早朝5時(冬期は6時)の総員起こしから午後9時の巡検まで、予科練生と同様、分刻みの日課が課せられていました。午前は座学が中心で、航空力学、気象学、物理学、機械学、さらに砲術、水雷術、航海術、運用術等にわたって幅広く海軍士官としての基礎知識が詰め込まれました。そして毎日のように試験が行われ、成績不良者には予備学生罷免、二等水兵への降格が待っていました。しかし、数学など理科系の授業で理解できないところがあっても、同じ班の理系学部出身者に教えを請うと教官よりも分かりやすく説明してくれて、すぐ理解できました。午後は体育が中心で通信訓練や陸戦、短

艇(カッター)、体操、武術、マラソン等の訓練が続けられ、予科練生と同様に班や分隊対抗で競技が行われました。予備学生の中には、入隊前の学生時代に、柔道、剣道、相撲、空手、レスリング、ボクシング、ラグビー、陸上競技、水泳、野球、スキー、スケート、馬術、その他運動部の有名選手や有段者が多数そろっていたので、対抗試合でその実力を発揮して大活躍、分隊員の士気を鼓舞していました。

大学等の自由な雰囲気の中で学生生活を謳歌していた飛行予備学生たちにとって海兵団や土浦海軍航空隊での厳しい規律や訓練には少々こたえた面もあったようで、彼らの日記には予科練生には見られない批判や不満が率直に記されています。しかし、予備学生には入隊すると准士官(予備生徒は上等兵曹)という地位が与えられ、日中の訓練や教育、起居動作の躰は予科練生同様に厳しく行われましたが、食事は従兵(将校に専属して、身の回りの世話などをする兵卒・従卒)が長机の上にてぎわよく配膳をしてくれるし、兵舎内には予備学生だけで上官もいないので、気分的にはゆったりとしていたようです。また予備学生が受ける制裁は鉄拳か練兵場一周の駆け足などで、予科練生を泣かせたバツタ(海軍精神注入棒)による罰直はなかったようです。

1943(昭和18)～1944(昭和19)年頃の土浦海軍航空隊の人員は、「予科練生」約6,000名、「予備学生」約2,000名、職員約1,000名で、総員約9,000名にのぼっていました。予備学生の兵舎は精進川の左岸(現在の霞ヶ浦高等学校校付近)、予科練生の兵舎は右

岸、現在の武器学校区域)にあって、予科練生とは一緒に講義や訓練を受けることもないので、めったに顔を合わせることもありませんでした。中学45回の戸張礼記氏も「10才年上の兄(戸張忠勇氏)は、日本大学本科の学生でしたが第13期予備学生として採用となりました。私が昭和19年6月1日に甲種飛行予科練習生第14期として入隊して間もなく、兄は予備学生として何かの教育あるいは用件で土浦海軍航空隊に滞在していたようです。ある日、兵舎内で吊床訓練をしていると、兄がいつの間にか窓の外に立って私を見ていました。訓練中だったので、声を掛け合うことはできませんでしたが、きっと兄は私のことが心配だったのでしょう。その後、隊内で兄に会ったことは一度もありませんでしたが、同じ所に肉親がいるというだけで随分心強かった。」と述べています(『続・阿見町と予科練』)。同じ航空隊内においても、それぞれ分刻みの日課で、兄弟といえども会う暇などなかったようです。

卒業後、飛行予備学生は少尉に任官して、小隊長となつて部下を率いて空の戦場に赴きます。飛行学生を指導した教官たちは「前線には予科練出身の熟練パイロットが多くいる。お前たちはパイロットとしての熟練度は幾分不十分であっても、その指揮能力で部下を引っ張っていかなければならない。」と予備学生たちを叱咤激励し、予備学生たちも操縦術のみならず、指揮官として必要な能力を身につけるべく、訓練に取り組んでいました。

参考 「海軍航空隊ものがたり」阿見町 (高21回 松井泰寿)